

鈴木勝忠校

江戸座談集

四

古典文庫

鈴木勝忠校

江戸座紙湯集

四

古典文庫

古典文庫第二六六冊

昭和四十四年八月二十日印刷発行

非売品

校者 鈴木勝忠

四 発行者 吉田幸一

江戸座俳諧集

東京都板橋区熊野町三四

印刷者 帝都印刷製本株式会社

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話(九一〇)二七一七
振替口座東京一四五九七番

目次

一、俳諧太郎河……………三

一、帛蚕……………八五

一、名録……………一九二

諧非

太郎河

上

所謂四時佳興非世之游俠子馳驅于花街携歌妓登酒樓以競豪奢但在騷人花晨月夕蛙詩會友步江相問酒家而朗吟經過而已今夫分闡四時品題各口号六言或探索於巾笥中而得焉或半成以闕筆者乃補其不足而得焉緝成鋟梓嗚呼非游俠競豪奢之徒所為而為之佳興亦可也

庚戌之夏

午寂散人

一
林鳩

上二ウ

春
之
一

かくれ家のもと清水や花盛
よろつ代共を合点若松



仙
里

「上二ウ

うつくしう雷声を出し初て

しかと井筒は田井のほこりか

大浪に極る月の遠眼鏡

鼠とありて犬茸となし

ウ

玉ならは匂ひの玉のからす瓜

きせるをねちる恪気もそする

陵園の破損願ひも埒付す

日まち男のよききぬを着て

飼れぬを程とき梶の高う居り

松か崎なる砂糖かみわる

入ほかと愚痴と行合黙礼し

いまた素の字はつかぬ百性

二番めは昨の仁王へ預けけり

遊ふに隙かないと云ふ事

「上三ウ

「

斗牛へは余程奇リ也渡る月

名
盥七つは借り出しつゝ

さし鯖の霜置はかりすき心

野郎にくらし傾城に愛テ

二度は人にならしといへる句に

申合て寺の洗濯

蠟燭の涙流るゝむかし物

蝙蝠迄に狐から扶持

名の月を玄猪の月か押返し

雪竿にせん思ひ切ル釣

洪帟は岩の手前も恥かしき

故ある舞台すゝしめの声

俳諧の栄は古今集にして

釜へがはりと鹿相引ツ切

「上四ウ

「

「上五ウ

ウ

鞍打の馬になりたる腹加減

ちからなき蛙骨なき豆腐

おもしろの膏の様な雨淋き

何歟止メけり咲ちらぬ花

玉垣と恐入たるほめ詞

きよきは水のさかりなるもと

桃

堀内僊里

酒故そはなはだ肥て桃の花

涼

君か代や見付へ這入ルひと涼

露

いとだての露も曇らしぬけ参

猪衣

紙絹の肩はおたぎの郡かな

上六ウ

鶯や声を葉にして坊主枝
 長閑にござり申す一村
 小袖鳳巾兄の趣向に傾て

春之二

曉雨

「上七ウ



五人て五舛笑れて居る

十月も煙らす匂ふ菊の月

泥に水棹の目立ッ横堀

ウ

一双の孫弟子殿の竹格子

童の売て売れる物有リ

神風の朱に塗箸伊勢土産

昼をは何と捨る吉原

相談に女交り芥子の花

そこを明れは月と真向ふ

草臥て食に這出る霧の奥

戻りもかつく石尊の太刀

額にてじろく深見十左衛門

たはこはあからず酒はあからず

御昏面の日は違ふても花盛

┌

┌ 上八ウ

名 見おろしなから雉子に手を打

足駄がけて鎌倉へ行老の春

穴堀大工虫歯本復

朝景の節句に似たる十五日

風呂敷とれは梨子地也けり

武士の二尺の雪に旅御用

糠喰馬を艤て居ル犬

俎板て同じ物きる隅田院

斯ふ降ふならぬける程降レ

我せここに一つ隠せし年知れて

千話は夜食の前後なるへし

太鞍とも月か鳴いたかの発句聞ケ

寛永正保慶安承応

ウ

慰みの僧のさかやき剃て遣ル

┌

┌ 上九ウ

┌

手桶にうつる母は六十

牛汚す土は瓦に焼れけり

見せる側から遣ふ新銭

よきて吹ケかたまる物は花の陰

紙敷クまではあらぬ若草

野老売

あすの夜は顔見てやらん野老売

暑

星は夏降そふにして降らぬ哉

蟬

蟬や釘うつところ縄からけ

厳寒

日輪に鴻の逆たつ寒かな

曉雨

「上十ウ

「

「上十一ウ



吹ぬ日の唐絵女や藤の花

箱に驚腹て炷

たはふれは蝶も小結を友と見て

乱間の丸を籠ぬけにせん

名月の入相ばかり心活キ

百匹取ツて投られに行

ウ

獲人の残暑を訪フも湯治以後

蠅になふられ老にけるそや

しみくくと小菊翠簾紙二柱

一度逢ふたて検使唾にむせ

茶か止メば木の葉かもとの手水鉢

梅沢山の暮ては五郎兵衛

先くをしくちり馬の暮の月

秋の果みな糸瓜軽石

「上十二ウ

「

新蕎麦は消ス豆腐より同しくは

石壺両の両に五貫の

関守に鐙を褒られ花の雪

目見え男のしげい小便

名

元船て樽をほぜくる糸遊び

僧正前の名号尊き

けふも又常山クサキの虫に狂ふらん

それか実かと云消して遣ル

恥かしや真ン丸になる墨の先キ

新場の犬の下駄を咎めす

顔見せは今盛久か星月夜

膝もきはづく菟薊の水

鎗持は小キ笠に肩をかし

団子の針でつなく篠懸

「上十三ウ

「